



道民一人ひとりの意識が、社会を変える

私たちが今やるべきことは。

「飲酒運転根絶と交通死傷ゼロへの課題」

第7回

飲酒運転根絶を願う一人ひとりの気持ちを、道民の総意へ――。

昨年末に開催された飲酒運転撲滅条例の制定を求めるシンポジウムより、一部を抜粋して採録する。

※主催：北海道交通事故被害者の会／世界道路交通犠牲者の日 北海道フォーラム2015(2015年11月15日) 於：かどろく(2)7(基調講演「飲酒運転根絶と交通死傷ゼロへの課題」)



フォーラムでは小佐井氏による基調講演の他、北海道交通事故被害者の会会員である遺族からのメッセージが寄せられた。

愛媛大学法文学部准教授

小佐井 良太氏

専門は法社会学。2006年以降、飲酒運転事件の被害者遺族に寄り添いつつ「飲酒運転問題と法」を研究実践。福岡県飲酒運転撲滅条例の制定や見直しに貢献し、広島県議会で政策提言。地域での条例に基づく飲酒運転根絶施策をテーマに、国内外で広く活動している。小樽・砂川の飲酒運転事件に関わり、NHK「クロスアッパ現代」(2015年6月)などにも出演。



飲酒運転根絶施策の目指すべき方向性

日本では、これまでも飲酒運転の違反者、あるいはその周辺者(お酒を提供した人、車に乗せた人など)に対して一定の罰則の整備、強化を行ってきました。ここでさらに処罰を重くしていくよりは、むしろ飲酒運転を「しない、させない、許さない」という形で地域環境を、処罰に依らない形で政策的に実現していくことがポイントだと思います。

地域住民、飲食店や酒類販売業者、駐車場所有者、タクシー事業者、運転代行業者といった方々が、それぞれの立場で飲酒運転根絶のために何ができるのかを明確にする。その上で、何か取り組みをしたいという時に、迅速に具体的な動きへとつながるような支援を政策として整備することが大切です。

飲酒運転根絶のための基本対策三カ条

- 1 アルコールに関する正しい知識の普及・浸透
2 アルコール問題への介入(治療的・簡易的)
3 規範意識・モラルの涵養と浸透

アルコール専門医療との連携と課題

飲酒運転の背後に存在するアルコール問

題。これに治療という形で介入する機会を作ることで、再犯を繰り返す人への効果的な歯止めになるという研究が、アメリカなどさまざまなか所で進められてきました。

国内でこれに取り組んだのは、福岡県と三重県の条例。いずれも飲酒運転で検挙された人に対して、専門医療機関でアルコール依存症の診断を受け、必要に応じて治療を行うことを義務づけています。

まだ試行錯誤も多いですが、医療関係者の方々は、「自分を訪ねてくる依存症患者の皆さんに、決して飲酒運転の加害者になってほしくない」と頑張っています。その取り組みが功を奏するための支援やバックアップも求められています。

飲酒検問の在り方

日本では春と秋の交通安全運動期間、あるいは年末年始など、特定の時期に飲酒検問を大々的に行うことでドライバーの注意を喚起しています。しかし取り締まりを行うにあたり重要なのは、いつどこで行われるか予測がつかないランダム性をいかに高めるかということです。例えばオーストラリアでは飲酒運転対策4本柱の一つとしてランダムな呼気検査が挙げられており、日曜日の午後のホームセンター・駐車場入り口など「まさかこんな」という場所で検問を行います。さらにシドニー、ニューサウスウェールズ州では非常に多くの回数の呼気検査を行っていて、多くの運転手たちが早期の出勤中に呼気検査を受けた経験があるといえます。

このような取り締まりの積み重ねで、常習的に違反を繰り返している人の「自分は捕まらない」という無根拠な自信を打ち砕き、違反をしなすべく必ず検挙されるとい

う認識を植えつけることが抑止力になるのではないだろうか。

飲酒運転根絶対策の目指すべき基本的な方向性

違反者・周辺者に対するさらなる処罰の強化

「飲酒運転をしない、させない、許さない」

地域環境の(処罰に依らない)政策的実現

さまざまな主体(住民、事業者、売業者等)が地域においてその立場上課せられる立場を明確にし、具体的かつ実効的な「支援」を政策として整備する。

飲食店の取組みと交通手段の確保

車で移動する機会が多い北海道ならではの特徴として、駐車場の多い郊外型の飲食店が飲酒運転を誘発しやすいという点が挙げられます。道東のある地域では飲食店と運転代行業者が連携して一定金額以上の飲食で3km以内の代行運転が無料になるサービスを行っています。これがそのままに共存共栄の取り組みと言えますよ。

北海道のように公共の交通機関が十分発達していない地域も多い土地では、いかに飲酒と運転を切り離すか、そしてその場合の代替交通手段をどう確保するかが大きな課題です。人口規模によつて、夜間バスがいののか、あるいは代行運転の方がより実効性があるのか。その点も積極的に検討されると良いと思います。

おわりに

これまで飲酒運転等による悲惨な事故が繰り返されてきましたが、被害者の方たちの訴えは、人々の考え方や社会を確実に動かしてきました。交通犯罪を取り巻く現状はまだまだ不十分で、対策が必要なおそらく少なくありませんが、15年、20年のスパンで見ると確実に改善していることが分かります。これをいかに次のステップへと続けていくか。飲酒運転の根絶は、決して一筋縄ではいきません。あきらめずに地道な取り組みを続けていくことによつて、きっとこの社会は変えられると思っています。

悲しい飲酒事故を北海道から無くそう。応援大使の吉田類さんもラジオから呼びかけ



HBCラジオにて好評放送中のレギュラーラジオ番組では、飾らない素顔のトークを繰り広げる吉田類さん。旅のこと、毎回さまざまな出会った人々のことなど、毎回さまざまなテーマで語っている。先日の収録では応援大使を務める「北海道飲酒運転ゼロ計画」の活動についても呼びかけを行った。

吉田類のゆる〜り・ほろ酔いと〜 HBCラジオ 毎週金曜17:20〜17:30放送中

「北海道飲酒運転ゼロ計画」では、ご協力いただける飲食店・企業をまた、ご意見、ご感想などのメッセージを募集しております。

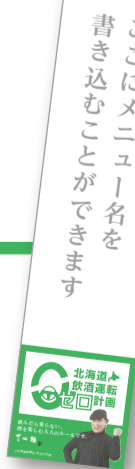
応募先・お問い合わせ 北海道新聞社 zero@hokkaido-np.co.jp

大人の情報マガジン O.toneも応援しています!!

詳しくは、6月15日(水)発売のO.tone vol.92で!



北海道飲酒運転ゼロ計画ツール ※ご希望の方は左記メールアドレスまでお問い合わせ下さい。



協賛 (順不同)



主催:北海道飲酒運転ゼロ計画実行委員会(北海道新聞社、あるた出版) 後援:北海道、札幌市、北海道警察、北海道教育委員会、札幌市教育委員会

協力: AIR-G' FM北海道、FMアップル、HBCテレビ「吉田類 北海道ぶらり街めぐり」、いまい、カメハタ、わしづ、電源開発 桂沢電力所、札幌パークホテル、道新会連合会、北海道全新聞販売従業員福利協会

企画制作:北海道新聞社広告局